

蜜社の獄について：思想史的一考察

福原，富貴子 / FUKUHARA, Fukiko

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

123

(終了ページ / End Page)

128

(発行年 / Year)

1960-10-08

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011812>

蜜社の獄について

思想史的考察

福原富喜子

一 はじめに

一般に蜜社の獄は、渡辺華山、高野長英等蘭学者及びその周囲の知識人の動きに神経をとがらしていた幕府が彼等に加えた大弾圧事件であると云われている⁽¹⁾。そしてその評価に対しては、文明東漸史以来種々な見方がされてきたが、それを大きく二つに分けてみる事が出来る。一つは思想弾圧であるとするもの、他の一つは政治的疑獄であるとするものである。前者に属するものとしては遠山茂樹氏が『洋学者個々人は貫きえず屈服したとしてもその苦闘の実践の社会的遺産として彼らの階級的限界を越えて近代的思想の萌芽を生み出した⁽²⁾』、『従って洋学は蜜社の獄の時期に最も近代化的転化の可能性に近づきつつあったのでありこの蜜社の獄以後その様な萌芽が完全につまみとられ⁽²⁾』たとしてその近代的思想を蜜社の獄の中で大きく評価されている。又佐藤昌介氏は『すなわち蜜社の獄の真相は華山ら蜜社と鳥居、林家らの漢学派との間に於ける洋学觀の相違、就中政治思想の対立に更に後

者の嫉視が加わって彼らが蜜社の支柱たる華山とその知識供給源たる高野長英、小関三英を陥れることにより洋学の政治化を抑圧し、知識層のかかる動向を阻止しようとした所であった⁽³⁾』と云って先の遠山氏の様に近代的思想の萌芽とはつきり云ってはいないがそれらしきものを認めている様である。これらに対して、後者に属すると思われるのに井野辺茂雄博士がその『幕末史の研究』の中で『処士の横議を許さざる幕府の制度に触れたがためなり』と云われ、又沼田次郎氏は『純然たる思想弾圧といふより処士にして政策を論じた事が一種の政治的疑獄の端緒として利用されたといふべき点があるので必ずしもその思想的立場のみの故ではなかった⁽⁴⁾』としている。

ここで考えるにこの処士にして政策を論じなければならなかったと云う所に問題がひそんでいるのではないだろうか。文化文政期以来洋学のレベルは著しく上った。その影響の及ぶ所次第に大きく幕府を恐れさせる様になった事など、又この蜜社の獄が水野忠邦による天保の改革直前におこされた事など考え合せると、

単に処士横議のためとか政治的疑獄とかですまされないものがある様に思える。天保期と云う変革期に臨まんとする時代を反映し、新しい流れを作り出そうとした所に幕府との衝突があったと考えられる。故にここでは天保期と云う時代の流れの中であらえ、その中で新しい動きの一つとしてこの事件を考えて行きたい。

二 対外論をめぐる

モリソン号事件が投げた反響は幕府の強硬な打払論となつてあらわれた。評定所の評議書に於てみられる打払論などはその良い例であろう。その評定所の記録方を勤めていた芳賀市三郎が評議文を写しとつて尙歯会に於て示した事が、一つのきっかけとなつて長英の夢物語、華山の慎機論が生れたのであった。

長英の記した蛭社遭厄小記⁽⁶⁾によれば、その写文をみて『坐中瑞阜、華山など地理学を唱へて名ある両三輩あるけるにそ、各々議しけるは云々』とあり華山、長英等が尙歯会の席で打払論について論じ合つた事が記されている。その結果『漫りに御打払になりなば外国に寇を結ぶ道理、後來或は由々敷大事も萌発せん、地理学を攻め万国の事情を詳にする者かかる時こそ国家の為に忠信を尽す可し、各旨趣を述て夫々へ内奏し可然と一同に論じなければ其後缺舌小記、慎機論、蛭社私記等の如き書を認め各存意を記し』たとあり又『夢物語と標題し書認め内々御役筋へ指出しけるに』とも記されており幕府が打払を中止する様な方向へ持つてゆきたいとする動きが感じられる。一方『元より国家の御政務に關涉したることなれば漫に世に出さず竊に同志の者共へ示しける

に、一大実に吠て万犬虚を伝ふるの譬にて奇を好むは清平世界人情の常、殊には世の交り博き文学者の説なれば不幸にして此書のみ諸方に伝播し、其後夢物語、統夢物語など書記しける者もあり朝野輿然として其説喧しかり』と同志の者にひそかに見せたものが夢物語評や夢々物語など夢物語に対する批判が現われる程読まれたのである。長英も世に広まる事を望んでいたのではないかとと思われる。この様に幕府の対外策に不安を感じた者がそれだけに終らず、何らかの形でそれをあらわそうとし働きかけようとした事は注目すべきことであると思う。この動きは幕府にとつてはありがたくないものであった。これを裏書きするかの様に幕府の天文方に仕えていた渋川六蔵が幕府に提出した蘭書類御取締方の儀申上候書付には次の様に書かれている。『近來浮薄之徒多御座候て名聞え蘭学仕実用之儀を心掛け不申只管奇説をのみ穿鑿附会仕各相誇候様成行御深慮と翻顔仕候のみならず反て世を惑し候媒と相成申候、其儘に差置候は、往々御政事之害とも相成可申候間急度此御取締御座候て學術衰廢不仕候様奉存候』又、『近年は自身蘭学不仕候者にても蘭学者を相招き其説を承り彼是附会いたし或は儀器類を製作いたし工夫新案と申成候類多御座候、是等も追増長仕候は、難被捨置儀も出来可仕候間夫々御取締方も可有御座哉に奉存候』と云つて尙歯会の事を知つておりその動きに危険を感じとつていたのではないかと思われる。この書付を提出したのが亥七月で天保十年七月の事である。しかも華山、長英等が無人島渡航の疑いで捕えられたのは天保十年五月である。その疑いのないのが判明するや今度は御政事を批判したと云う理由で各々罪せられている。華山に刑が宣告されたのは天保十年十二月で

あり長英もその頃ではなからうかと思われる。渋川六蔵の建言が華山等の罪に關係がないとは断言出来ない。以上の様に幕府が統制にのり出さねばならなくなつたと云う事は幕府にとって危険な方向へ蘭学の影響が及んでいった事になるであらう。次に幕府の忌諱に触れた長英、華山の思想について考えて行きたい。ここでは紙面の關係で長英の対外論のみを取扱う事にした。

三 高野長英の対外論について

長英の罪の原因ともなつた『夢物語』⁽⁸⁾を書いた直接の動機は前述の評定所の打払決議の写文からであつた。しかしその動機から單に打払反對論として片付けてしまふのはどうかと思われるのでまず『夢物語』の内容について検討してみたいと思う。『夢物語』は甲と乙との問答形式で題が示す如く、夢に託して幕府の對外策を批判したものである。極めて婉曲に、用心深く批判して幕府の忌諱に触れる事をさけたものであると共に、海外の事情を知らせようとする啓蒙の意を多分に含んだものと考えられる。

まず一問、二問はイギリスの国情、モリソンの事について述べている。『そもイギリスといふは如何なる国に候哉』との一問に対してイギリスの地理上の位置、人口、国民性、その植民地政策を述べ特に中国との交易についてくわしく答えている。モリソン号がイギリス船であると伝えられていた事からもイギリスの概観を知らせようとしたものであらう。そしてそのイギリスが強国であるとの印象を受ける様に書かれている事は興味深い。第三問目で初めて長英自身の考え方が見られる。問いに曰く、元來漂流人は和蘭陀に託して送還する様いってあり、イギリスも心得ているはずであ

る。しかるに今度は『右様高官重職のモリソンと申者頭取仕候て送來候事一向合点行き不申候、御高見も候はゞ御腹藏なく御話し聞せ被下度候』と書いて、その答の中でイギリスが何んの目的で漂流人を送つてやってくるのか述べている。『是迄数十年前より頻りに日本へ交易を願度趣も相聞え、せめては海上通船の砌薪水欠乏の節は右のみを願』って『漂流人を送來るを名目に仕候儀と被察候』しかるに『唯イギリスと唱へ候得者海賊とのみ被思召御取合も無之右の船国地へ近寄候得者有無の御沙汰もなく鉄砲又は大砲にて御打払と相成凡世界中かくの如き御取扱方無之方に候』『是は蘭人私利の爲申立候てイギリスは海賊とのみ譏奏仕候故の儀と奉存候』この様に幕府の對外策を批難すると共にその鎖國政策、つまり西洋に対してはオランダ一国のみの交渉を遠まわしながら批判しているのである。次の第四問は『当御代の初より蛮国交易は和蘭陀のみにて他には御免無之鎖國の御政道に付迎も交易御免の儀は思ひもよらず』『此度も御打払可有之と被存候、左候はば先方の者共如何心得可申哉』と云うもので答として『西洋諸国にては殊の外人民を愛憐仕、人命を救候は何よりの功德に仕候事にて』『西洋の風俗はたとひ敵船に候共自国の者其内に有之候得者漫に放砲不仕事に御座候、然る処イギリスは日本に對し敵國には無之謂はば付合も無之他人に候処、今般漂流人を憐み仁義を名として態々送來候者を何事も取合不申直に打払に相成候はば日本は民を不憐、不仁の国と可存候、若又万一其不仁不義を憤り候はゞ』『後來海上の寇と相成候て海運の邪魔に相成候哉も難計、左候はゞ自然國家の大患にも相成可申たとひ右等の事無之候共右打払に相成候はば理非も分り不申暴國と存じ云々』と云つてい

る。これには種々な意味が感じとられる。第一に幕府が人民に對して『御国之災害を被為除候爲賤民之存亡に不拘御取計』う態度と西洋諸国の何事によらず人命を尊ぶ態度とを對比させて幕府の非を云っている。又不仁不義の言葉で強調し、礼節に重きをおいて打払に反對している事は武士階級に對して訴へるためのものではないかと思われる。第二に一般的な外国觀とは当然ながら異つて、伝統的な夷狄觀をこえた人間的なものがみられる事である。西洋諸国が人命を最も尊ぶ事を述べている事はこれまでの夷狄觀を改めさせる啓発的な意圖が感じられる。さて最後の五問であるが『然らば如何取扱ひ可然哉』の問に對して『先唯今イギリス人の底意は兎も角も彼仁義を唱へ漂流人を送来』たのだから『長崎なりとも何方なりとも着岸御免被仰付右漂流人御請取被遣、右の御挨拶として厚く御褒美御恵み被下置』、『扱交易と云う所に至り候て国初より御規定の処厳しく被仰渡断然として御制禁の旨被仰渡候はゞ我に於て仁義の名を失はず彼に於ても又如何とも可致様無之恨も憤りも仕間敷、万事穩に相済可申と被存候』と答えている。これでは單に打払だけに反對で幕府の對外策の根本である鎖國とは何ら本質的には變りない。一問二問でもわかる様に海外事情に通じていた長英が鎖國論と何ら違ひのない事を述べたのはなぜであろうか。又獄の後に記した『知彼一助』⁽⁹⁾に於いて『閉洋鎖國の制は富士強國に非ざれば之を行ふ事能はず』と述べている事からもこの最後の五問だけで鎖國論と大差ないと云つて良いかどうか疑問に思われるので、この物語を書いた目的をもう一度考えてみたい。

前にも述べた様に夢物語には海外事情を知らせようとする啓蒙

の意志がみられる。とすると誰れかに見てもらい、読んでもらねばその目的は達し得ない事になる。『各旨趣を述べて夫々へ内奏し可然』『何卒縁を求め其内枢要の御役家の御内覽に入れ奉りまさかの時に御見合せの万一に供へ奉りたしと同志の者二三人に見せ侍りしに』『専ら御役家の電覽に供へ奉りて御取用もがなと願ふ心』⁽¹⁰⁾づもりで書かれたとすると当然その見せる対象は幕府であり、幕府の役人であり、又尙齒会の同志であつたと考えられる。特に尙齒会の席で示されそこで論じ合つた事件であるし、尙齒会の同志がその対象の主であつたと考えられる。しかるにその会を構成しているメンバーは大部分が幕吏であり藩士であつた。いわゆる封建支配者側の知識人たちであつたのである。その中で長英のみが單に町医者として被支配者側にあつた。この様な人々と長英は接してしたのである。夢物語がこれらの人々を意識して書いたものならば当然その鎖國批判も弱く、骨ぬきになるであろう事は考えられない事ではない。周囲の者や相手とする者が幕吏であり藩士であつた所に、長英自身の思想と矛盾するものが出てきたのである。ゆえに結果としては打払に反對だけの現存の鎖國政策を根本から否定する事なく終つてしまつたものと思える。結果的には避戰的鎖國論を述べたのであるがしかしそれを意識しての上で書いたと思われる。それは前述した『扱交易と云う所に至り云々』と云つてゐる所と矛盾する様な言葉が出てくるのである。つまりロシアのレザノフの例を引いてレザノフが『交易を願ひ不叶』、『是を恨み憤り只一艘の船にて蝦夷の騷動を』ひき起したと云つて更にモリソンは『魯西亞のレザノフの類には無之非法の御取扱有之候はゞ後采如何なる患害出来候哉』と述べている個

所である。モリソンがレザノフと同様交易を望んでいた事は長英は充分に承知している。それにもかかわらず我国に於ては交易は禁止されているから引きとつてくれと云えば恨も憤りもなく帰るであらうと述べているのである。真にこの様に考えたのであらうか。否そうではないからレザノフの例を引き交易を願つてきたが叶わず是を恨み憤つた事を云いモリソンはレザノフの比ではない事を述べているのである。長英が云う非法の御取扱有之云々とは幕府の交易禁止、外国船打払いを指しているのではないかと思われる。華山の幕府の対外策を批判した憤機論中にも交易が行われずそのまま帰したら一国故を以て地球諸国に害ありと戦をしめてくる名目を与える様なものだとして交易をぬきにして帰す事は不可能であると云っている。まして華山に洋学知識を教授した長英である事を思えば同様な意見を持つていても不思議ではない。それに夢物語には『至愚の我輩忌憚らず其職にあらずして国家の御政事を論ずる様相聞え其罪軽からぬ事に候』とか『是は国家の御政事の事中心々愚昧の賤民などの申上候も恐多き事に候』とか云つた幕府を憚かつた言葉をしばしば書いている。しかし華山の憤機論にはそれが全くみられず却つて激しく批難した言葉が数多くみられる。この差は人に見せるべく書かれたものとそうでないものとの差と云う事が出来ると思う。夢物語は華山も『同人方へ参候節爲見候』と云つており、又夢物語に対する反響として『夢物語評』『夢々物語』など書かれていた事からも割に多くの人が読んであらうと推察出来る。

以上の如く考えてくると長英の夢物語は同志の者に見せるため、又啓蒙の意味をもつて多くのの人々に読んでもらうため書かれ

蜜社の獄について (福原)

たものと云える。対象となつたのが幕府の役人、藩士たちでいわゆる支配者層の人々であつた。ゆえにその鎖国政策の矛盾を根本から批判する事は故意に避けたと思われる。ここに長英の弱さを認めないわけにはゆかないが、その批判精神の芽ばえ、海外事情啓蒙の意志は特筆されても良いのではないかと思う。

四 夢物語評と夢々物語について

長英の夢物語に対する反響が夢物語評、夢々物語となつてあらわれたが先の夢物語評は作者が不明であるが内容をみると幕府の役人ではないかと思われる。夢物語に対する批評では『盛にイギリス国の兵備、仁政などある様に書きなし又日本近海へ往来自由などといへば我に油断せしめざる様なれども却て小民を恐れしむるに似たり』又己が意見の処は彼が為に遊説するに疑はし、是等は遠慮すべき事の様に思わるなり』と国政を論じた事を非難している。そして『渠若乗渡るとも何を遠慮して打払はざらんや』と云つて長英と真向から反対の立場をとり、長英が試みた人々に対する啓蒙を恐れている様子がうかがえる。後の夢々物語は対話形式で、一人は長英の意見に賛成し他の一人は反対している。賛成者は次の様に述べている。『いかに武道と称する日本にても四道一統武備も衰へたる困究の時節なれば若や英利氣船御打払ひなどといふ様なる手あらき御取扱しては一通ならぬ深謀詞のある英利氣と承われば夫を憤り東海にある属国を引きつれ来りてポンポンとやらかしては大変の事なれば、何分に物語の説のごとく御手柔かなる御取扱あらまほし、廟堂の人の目にとまり此論尤といふ御沙汰もありて御打払などといふ事もなるましければもはや大変

の事もなく無事恐悦となるへければこの夢物語は僅十枚斗りの紙なれども数万の軍兵数万の火炮にも勝れる大切といふもの』更に交易の事にふれ『何分交易は許さぬがよい杯といふは井蛙の見といふもの也。其上眼前今日東にても東西南北逕漕交易せぬはすまぬこと』と短を補う意味での交易論を主張しているのである。一方我国と今度のイギリスとの交易という事になると『何分にも武備屈かぬ時節柄なればイギリスとて炮術も殊更巧み也と聞ゆれば後にはまた日本の徳になる事もあるべし』と云つてさわらぬ神にたたりなし式の消極的な論となえ、まず交易は相手の優れた兵備をとり入れる事を先決としている。この様に、こと我国に及ぶと消極論となつてしまふのは夢物語でも同様である。次に反対者は『日本が外患なき故にいよいよ御武備も衰え四海中の眠りも深きからは』『英利氣殿が江戸近海にて二十三十発もボンボンとやる様な都合に推し移りらば求めてもなき日本国中の好き御目醒しとおもいけるなり』と云つて外患なき故武備が衰える事を憂いて『事の有無も問はずしてあたまた手荒き事をしては彼がボンボン辞あらしむるといふもの故に』打払に反対しているのである。長英の打払反対論とは本質的に異つてゐる。長英はイギリスが戦をしかけてくる事を恐れているのに対し、戦をしかけてくる事を望みその結果を恐れる事なく『日本国中が丸になつて防ぐといふ日には仮令支那イギリス魯西亜が一時に渡りきても元来武に勝れたる我国なればどんな事でも外国に負ける氣遣はなき』と云つてゐる。更に『海外の防禦さへ堅固なれば耳目官もいらざるものにて』と鎖国も良しと云つてゐるのである。交易についても『天命自然の道理といふ事をしらぬ縮くくりのなきたわけ論』と

全く認めていない。『聖人の教といふ事をしらぬ夷といふ処也』とか『全く人倫などいふ學問はなきが故也』とかいつた外国観と共にこの考え方は先の夢物語評の作者と根本に於て同じである。ただ現状の把握において異なるだけである。夢物語評の作者は何ら現状について不安、不満を感じている様子はみられないが夢物語の反対者は外患なき故に武備が衰えている事を憂い『金穀などの利権さえ一切下々にとられ天下国人の上の方にて大方困窮し給ひてこの日本に有る五穀さへ不自由にして生靈を餓死させる様な有様にては外寇より先に内寇かと思』つて案じてゐるのである。特に外寇より内寇かと国内問題に眼を向けている点など封建社会の危機を感じとつてそのたて直しを叫んでいる様に思える。

以上の如く長英の夢物語に対する三つの反響は第一は夢物語評にみられる処士にして国政を論じた事を強く非難し、打払論に全面的に賛成するもの、第二は夢物語の賛成者にみられる長英の意見に賛成し現状の不安を時代の流れにそつて解決しようとするもの、第三は幕府の政策と根本では同じであるが封建社会を再強化しようとする方法に於て打払反対論となえ長英の考え方に反対するものである。

註 (1) 日本歴史大辞典第十五卷一九六頁 (2) 遠山茂樹『明治維

新』三一、三二、三三頁、(3) 佐藤昌介『渡辺崋山の洋学研究と

蜜社の獄』文化十八卷一頁 (4) 沼田次郎『幕末洋学史』(5) 海舟

全集第二卷 開国起源 (6) 高野長英伝 (7) 海舟全集 開国起源

下一七〇頁 (8) 高野長英伝 (9) 高野長英全集第四卷 (10) 高野長

英伝「鳥の鳴音」(11) 崋山全集一二一頁 (12) 共に日本海防史料

叢書第四卷「海防叢議」所収